

CONTENTS

自作自演188 高島ゆかり・黒川喜洋彦・山田浩史 2
 JIAに入会して 野々川光昭・豊田直樹 3
 <対談 第3回> 建築を囲む科学 前編 生源寺眞一氏に聞く 4
 第3回 建築家は、リージョンを持つ。
 都市型アートイベント「sebone (せぼね)」 黒野有一郎 6
 「JIA正会員」は全員「登録建築家」に 建築家資格制度について考える<私の意見>
 尾林孝雄・加藤幸治・中西修一・森口雅文 8
 特集・連続企画 地域社会と建築をつなぐもの2
 <対談> 美浜町菅河和団地基本設計プロポーザルを通して見えてくるもの
 石田富男・栗原健太郎・岩月美穂 10
 JIA愛知発 研修委員会 忘れられない建築 in 京都
 畠山成好・関戸隆久・後藤晃久・勝濱大輔・山上 薫・田中英彦 12
 JIA静岡発 第67回静岡県建築文化研究会 講演会
 伊礼智氏「設計の標準化から生まれる家づくり」 高橋雅志 14
 JIA三重発 建築文化講演会 三分一博志氏「地球のディテール」 宮原良雄 15
 ▶東北からのメッセージ
 木に向ける視線と森に向ける視線① 久野紀光 16
 ▶東海の減災を考える 名古屋大学減災連携研究センターからの提言
 「南海トラフ巨大地震」の経済被害想定が意味するもの 山崎雅人 17
 「ARCHITECT」表紙写真「Intuition」シリーズ(2014.3~2015.3)を振り返って 横関 浩 18
 Bulletin Board 19
 保存情報 第161回 望月家住宅 富田正行 20
 沼津御用邸 西附属邸 谷村 茂 20
 理事会レポート 鳥居久保 21
 東海支部役員会報告 中西修一 22
 東海とっておきガイド ⑦⑦ 三重編 鈴木道夫 23
 地域会だより 23
 編集後記 福田一豊・伊藤恭行 24

東海の集落 1

本号より表紙写真は、東海の集落シリーズです。四県にまたがる東海地方の多様な自然に適應する集落の姿を、12回を通じて紹介していきます。初回は、東海地方最北端にあり歴史的、地理的にも特徴のある岐阜県飛騨市神岡町(旧吉城郡神岡町)です。

険しい山々に取り囲まれ、北アルプスから流れ出る雪解け水を湛える高原川が街の中央を縦断する神岡。かつて東洋一と呼ばれた鉾山の町でした。その歴史は古く、奈良時代養老年間から亜鉛や銅の採取が行われたとあります。江戸に入り、富山から



Google Earthより

高山を結ぶ越中海道が通り、流通の要衝の地として栄えました。また、戦国末期から江戸時代にかけて銅や鉛が増産され、戦争期から高度成長期に至り、産出量は加速度的に増えていき、世界有数の鉾山となりました。その一方で、鉾山からのカドミウムを含む排液は、四大公害病のひとつイタイイタイ病を発生させました。国家繁栄の陽と陰が刻み込まれた街なのです。2001年に鉾山は閉山され、1300年続いた鉾山の町としての歴史は幕を下ろしました。1983年には採掘坑を利用してつくられた、東京大学の宇宙素粒子研究施設「カミオカンデ」、1996年には「スーパーカミオカンデ」が稼働し、小柴昌俊さんのノーベル賞受賞によりその名は広く知られるところとなったのです。

生津康広
生津建築設計室アーキハウス





高島 ゆかり (JIA 静岡)

アトリエ結 (沼津市小諏訪523-1 TEL 055-952-3345 FAX 055-952-3359)

現代社会の地方都市

イスタンブールとパリを中心とするフランスを旅した。イスタンブールが都市として大きく発展したのは4世紀。ローマ帝国・ビザンチン・オスマン時代の建築が数多く残る。街は旧市街と新市街、そしてアジア側に分かれている。どの街もかなり古く、有名建築は観光地では保存されているが、裏通りに入ると、朽ちている建築が多い。密集地での改築、新築は困難であると思う。ガラタ塔の上からイスタンブールの街全体を見渡すと、郊外には高層ビルがあちこちで建設中であつた。経済や人々の要求から考えれば、新しい地に建築することが効率よく、また新鮮さも味わえるであろう。しかし、古い街の路地、それを取り巻く建物は今後どのように変わっていくのであろう。日本でも同じことが言える。

パリも古い建物を生かした都市である。しかしロンシャンに向かう電車から見ると、農業大国のフランスには、パリ以外の大きな都市はなかった。広がる畑の先に集落があり、そこには必ず教会が建っていた。

特急電車が止まるリュールの町に降りた。駅にはあまり人影はなく、駅前商店街も閑散として、人があまり歩いていない。日本の地方と同じく、駅から少し離れた場所には車が行き交い、フランスでも地方が車社会であるということを知る。

海外を旅行しながら、もちろん文化は違うであろうが、現代社会の都市問題はどこか似ていると思えて仕方なかった。旅行で出会った人たちは皆、快く接してくれたし、特に地方に住む人たちは親切で、かつ物価も安く、心安らいた。日本に帰ったら、地元のまちづくりにできるだけ協力したいと思えた旅だった。



上 | イスタンブール、中央にガラタ塔
下 | 塔からの眺め



黒川 喜洋彦 (JIA 愛知)

黒川建築事務所 (名古屋市昭和区鶴舞2-10-5 TEL 052-882-0281 FAX 052-871-1884)

濃尾平野に思う

岐阜県海津市南濃町の山中にある行基寺を訪ねました。山号を臥龍山、別名「月見寺」と呼ばれ聖武天皇勅願・行基菩薩開基と伝えられる古寺です。というのも私自身、西山浄土宗の信徒であり、当時はあまり意識していなかったものの一応中高6年間を仏教精神に基づく教えを受け、在学中はもちろん、同窓の集いあるごとに法然上人の御歌「月影」*を斉唱しています。そんなこともあり、この月見寺のあることを知り訪ねました。その月見の間から眺める木曾三川と濃尾平野、そして名古屋駅の高層ビル群は、お寺の立地が標高150mということもあり、私たちの住むこの平野が長年にわたり形づくられてきたその時間が目に見えるようでした。

今年は私の干支ですので、72年、ほぼこの平野で過ごしてきました。そして行基がこれを目にしたのが約1300年前。ここからの景色は恐らく1300年前と変わらず、こんな風景が広がっていたでしょう。そして天気の良い日に見える名古屋駅周辺の高層建築群。科学の激しい変化の只中で、変わらぬ自然とその重要性。変わらぬ自然を前にして、自身のこの70年を思い、上人が800年前に何を思いこの月を眺め、どんな気持ちで「月影」の歌を詠んだのか、この平野で過ごした小学生のころ、父母のこと、祖父母のこと、兄弟のこと、幼友達のこと、さまざまな思いを巡らせながら名古屋に帰ってきました。

※月かげのいたらぬさとはなけれどもながむる人の心にぞすむ／法然上人



月見の間からの眺望 (行基寺のHPより)



山田 浩史 (JIA 岐阜)

ヒロプランニング (各務原市那加北栄町28-1 1F TEL 058-380-2313 FAX 058-380-2314)

ランタンのあかり

前回、趣味のキャンプについて書きましたが、またまた書きます。(笑)

キャンプをしていると「暮らし」の原点(に近いもの)にふれる機会が多くあります。そのひとつ「あかり」についての話です。あかりといえば「火のあかり」、暖かくてこれに勝るものはありませんが、あまりにも「原点」過ぎます(笑)ので照明について…。

キャンプではガソリンランタンを使用します。当然スイッチひとつで点くわけではなく、一晩分のガソリンを入れ、ツマミをシュコシュコ何度も押してタンク内の空気を抜く、ガソリンを噴出させながら着火、マンテルという部分が燃えて「あかり」となります。手はガソリン臭くなりますし、手間のかかる照明器具ですが、点けば1台で230W相当の光を放ち暗闇を照らしてくれます。木々に囲まれた大自然の中、ポツンと照らし出されたその「あかり」には、何とも言えぬ魅力があります。LEDの電球色なんて到底かないませんし、電球だってかないません。なにせ燃えて光っているのですから。

ランタンの傍らで椅子に座って佇むとき、あかりの有難さに気づかされます。その暖かさは、光の色だけでなく、燃えて発する熱、小さく聞こえる燃える音、ガソリンの微かなにおい、それらすべてが一体となって五感を刺激しているからこそ感じられるものだと思います。技術の発達や経験の積み重ねにより、より快適で使いやすい、安心で安全なものが暮らしの中に取入れられていくことは素晴らしいですが、一方で、常に「原点」を意識して失わないように心がけたいものです。



☐ JIAに入会して



野々川光昭 (JIA 愛知・正会員)

オウ環境設計事務所
(名古屋市中区大須4-10-32
上前津KDビル6階
TEL 052-242-2331
FAX 052-242-2354)

これまでの30年ほど、主に住宅地の住環境づくりを考えてきた。環境設計事務所という名は、30年前は周囲から何をやっているのかとよく聞かれたが、最近ではあまり聞かれなくなった。そのことから「環境」に対する世の中の認識の変化を感じている。当初はランドスケープ、後に建築に携わり、建築とランドスケープをつなぎ融合したいと常々思う。「人が環境をつくり、環境が人をつくる」という。年月が経ち訪れたとき住環境と人が良い関係を築いている姿を見るとほっとするが、反省することも。50歳を過ぎ残された時間が多くなく、対してすべきことが多いことに気づきJIAに入会。折しも「正会員全員が登録建築家」の議論、その委員会で「建築家」を改めて考える機会を得た。



豊田 直樹 (JIA 三重・準会員)

Y's建築設計事務所
(鈴鹿市神戸2-9-63
TEL 059-367-7305
FAX 059-367-7306)

このたび、日頃からお世話になっている先生方にお誘い頂き、準会員として入会させていただきました。

日々の業務はもちろんのことですが、建築を学ぶ上で自分を大きく成長させると感じるのは、出会う人々との対話から得る刺激や関心であり、JIAはそのきっかけにあふれた、とても魅力的な環境だと考えています。多くの先生方が集う貴重な場に未熟ながらも積極的に参加し、さまざまな経験を重ね、豊富な知識を身に付けることができればと思っております。いずれは自分で設計事務所を構えて、人や地域に役立てる、自分なりの想いを持った「建築家」になれるように頑張りますので、どうぞよろしく申し上げます。

「学者の説を真実として受けとる側からみれば、各分野で分業化がすすんでしまったことを明らかにしている。広告サギの流行もまた分業化の世相を隠れ蓑に利用している。国会議員、学者、新聞が語れば、真実として認知されていく。それは明瞭な権威というものではない。専門家の権威すら曖昧で、うわさに近づいてしまう。そのメカニズムのなかに学者すら巻きこまれてしまう。

『うわさの遠近法』(松山巖、1993年、青土社)より

この連載は非建築の研究者と建築の研究者が「建築」をキーワードにして対話でつながるものです。このつながりが会員建築家や他の研究者にも広がり、東海独自の建築や研究活動が出来上がっていくキッカケになることを望みます。

第3回は『農業がわかると、社会のしくみが見えてくる 高校生からの食と農の経済学入門』(2010年、家の光協会)などの著作がある生源寺眞一氏(名古屋大学生命農学研究科教授)です。聞き手はブリテン委員の伊藤恭行氏(名古屋市立大学教授)です。

吉元 学 | ワーク・キューブ



縮小社会、考える時代に

伊藤 まず先生のご研究を簡単にご紹介いただけますでしょうか。

生源寺 専門は農業経済学です。経済学の中の農業あるいは食料を対象にするという性格と、農学の中の一つの部門という性格の両方を持っています。経済学にもいろいろな流派があるのですが、私の場合は近代経済学というかミクロ経済学をベースに議論・研究します。学部学生の講義は、最初は経済学部の講義とそんなにわかりません。途中から農業の現場や食の問題に接近します。

食料は、これなしでは生きていけません。経済学は体系的で非常にパワフルだと思いますが、経済学が有効性を発揮できる領域とそうでない領域があって、農業と食料の経済学は、経済行動におさまらない、そういうところにも目を配る学問かなと思います。

伊藤 僕ら建築の立場は、都市の側から郊外、農村を見る視点を持ち、先生のお立場は農地、郊外から都市を見る、と簡単に分けたときに、その境界のところが、日本はヨーロッパの国と違って明快に分かれていないと思うのです。農地と住宅地が虫食い状の形が典型的な郊外

の風景だったりする。その辺はどのようにお考えでしょうか。

生源寺 おっしゃるとおりですね。私は大きく二つ要因があると思っています。一つはやはり制度の不備の面。1968年の都市計画法と69年の農業振興地域の整備に関する法律で都市側の制度と農業側のゾーニングができたのですが、実は都市的な土地利用と農村的な土地利用と、全体をきちんと俯瞰して計画するという発想に乏しかったと思うのです。ですので、全体を考えるシステムをもう1回つくりあげていく必要がありますね。その点でいいますと、東日本大震災で被災した地域の復興は、私はときどき現地で話を聞いているのですが、全体としての形を考える一つのきっかけになるのではないかと。これも難しい問題ではありますが。

もう一つは、私は、日本は経済の成長が早すぎたということではないかと思っています。1955年が高度経済成長のスタートですが、所得倍増計画があり、とにかく一心不乱にというか、何も考えずに進んだような時代だった。そうしますと、土地利用の制度を踏み越えていろいろなことが起きてしまった、ということがあるのではないかと思いますね。

伊藤 ちょうど今は、そのお話の逆の方

向にあるかなと思います。縮小する都市、人口が減少し家もそんなに要らないという時代です。

生源寺 縮小していく部分と、むしろ従前の土地利用に近い形に戻るといふ部分がある場合に、その戻り部分についてどうするかという準備があまりないと思うのです。戻るといふのは、例えば宅地の農地への転用ですね。ほとんど話題になったことはない。これからは恐らく単純な逆転用だけではなくて、合併、分割などで農地を集団化する一種の交換分合もありうると思います。そうして新しい形に修復していく。これは20~30年のスパンが必要でしょう。逆にそういうことを考えていくことのできる時代になっているのかなと。

話が飛びますが、2000年12月31日のまさに年が変わる時刻に、東大で新ミレニアムを迎える催しがあり、当時私は学生委員会の委員長として安田講堂の前におりました。そのときの蓮實重彦総長のスピーチがとても心に残っています。「失われた10年」ということで世の中は暗澹たる空気に包まれているが、この10年は大変よい経験をしている、経済成長の時代は猪突猛進だったが今はじっくり考えることができる時代だ、というお話でした。そういう意味では、土地利用

とか都市計画、農村計画という観点からいうと、今ようやく落ち着いて全体を見ながら発想できるようになってきたと感じます。

伊藤 そうした計画は多分、建築や都市の人間だけで考えてもだめで、先生のお立場のような方と両側からの視点がないと良い方向が見つけられないでしょう。

情報発信が重要

伊藤 建築の世界では工事現場で若い職人さんがすごく減っています。バブル崩壊やリーマンショックでそのたびに労働単価が下がり若い人が入ってこなくなりました。今は景気がいいのですが、今度は建物をつくれる職人の数が足りません。職人は一旦減ると取り返すまでに10年、20年かかります。農業も同じようなことがありそうだなと思いました。若い世代の人たちが夢と将来への期待をもって入れない世界はだめになるような気がします。

生源寺 非常に大雑把な数字ですが、若者の新規就農が年間大体1万5,000人です。けれども定着するのがそのうち1万人。3人に1人はやめている。しっかりトレーニングを受けた農業大学卒業生にもやめる人がいます。本来2万人入ってくる状態が長期的に続けば、日本の農業は持続可能な年齢構成になるだろうといわれています。今はその半分しかないので非常に心配なのですが。

ただ、受け入れる側も考えなければいけない部分があると感じています。農村には何代も続く村社会の部分があって、いろいろな慣習や共同作業などの決まりがある。それが若い人、あるいは地域で育っていない人には通じない

ところがあると思うのです。そこは丁寧に説明してあげて、納得のうえでやっていく形が求められているだろうと思います。農村のものの決め方、考え方にもチェンジが必要かなと。

この20年で一番変わったのは、情報の発信の部分だと思います。今は言葉の問題さえクリアできれば世界中に発信できる。生産物が外国産か国内産か、環境に配慮した農場でできたものか、もっというと働いている人がやる気を出している農場かどうかという情報は最終生産物を見ただけでは分かりませんが、今、消費者が判断する要素のかなりの部分は、そうした製品の背後にある事情だと思います。これには情報の発信が必要ですね。ITは若い農業経営者は得意でしょうか、追い風だと思います。

もう一つ、対面のコミュニケーションとなると、やはり女性のほうが強い。情報の発信によって消費者をつかむ、あるいは消費者と対応することを面白がる、これらのことは農業を変えていきつつありますね。女性にもっと農業に定着してもらうためには、おしゃれな作業着とか、何よりトイレの整備です。考えれば当たり前前の話で、いい加減なトイレよりはやはり地域の人でも使えるような、農村らしい、景観を壊さないトイレが欲しい、という話が出てくることはありえます。

伊藤 その辺は僕らが知恵を出さなければいけないところですね。

日本の風景のこと

生源寺 私は学生時代、農業史をやりたいと思っていたことがあるのです。それでこのごろようやく歴史の勉強を始めています。日本では、農地、特に水田は江戸前期に大開発があり、日本の農業の原



しょうげんじ・しんいち | 1951年愛知県生まれ。東京大学農学部農業経済学科卒業。農林水産省農事試験場研究員などを経て、1987年東京大学農学部助教授、1996年同教授。2011年から現職。日本農業経済学会会長、食料・農業・農村政策審議会会長、生協総合研究所理事長。著書に『日本農業の真実』（ちくま新書、2011）、『農業と人間』（岩波現代全書、2013）など多数

型ができたのですが、それは開墾するとか水路を引く技術が生み出されたからです。戦国時代の築城技術からきているのではないかという話があるのです。つまり土木的な、物理的な改変ということもありますが、測量とかの技術の進歩がベースにあって水田開発が急速に進んだのではないかと。そうして、米ができて人口が増え、都市が形成されてきた。そういうことをもう1回勉強してみることも面白いなと思っています。

伊藤 重要なことですね。古い地名には歴史の記憶が残っています。

棚田などは僕らから見ると土木的というか建築的な風景です。というのは、水を有効に使う技術であり、全部水平線がキープされているんです。コンターライン、等高線ラインがそのまま田んぼの風景になっている。今の土木技術のお話を伺うと、現代まで残っている日本の風景は、そういうものが支え、つくってきたのだ、ということが分かります。

(前編終わり：5月号に続く)



聞き手
伊藤 泰行 | CAn・
名古屋市立大学教授

都市型アートイベント「sebone(せぼね)」

黒野有一郎 | 一級建築士事務所 建築クロノ

建築家は、地域へどのようにアプローチして、地域とどのようにかかわっているのか？

地方都市・愛知県豊橋市の「まちなか」=駅前エリアと「水上ビル」における10年間の活動を、一例として紹介する。今回は、「水上ビル」を舞台として、現在まで続くアートイベントとそれを興した人たちのことについて書こうと思う。

西武百貨店の撤退

2003(平成15年)8月10日をもって、豊橋駅前の「西武百貨店」が閉店となった。1932(昭和7年)開業の「丸物百貨店」に端を発し、1970年代に「豊橋西武」と改称されて30余年。「西武百貨店」は、前回紹介した水上ビル(大豊ビル)へと移った駅前の跡地にできた「名豊」、1970年代に駅前大通りに建った「豊橋丸栄(現:ほの国百貨店)」と並んで、昭和の時代、豊橋駅前を代表する商業ビルであった。

バブル経済の崩壊後、いずれの百貨店も往時の勢いは薄れたが、ことさら「西武撤退」のニュースは、当時東京に住み、たまにしか帰省しなかった僕にとっても

大きなショックであったことから、地元の衝撃は大変なものであったろうと想像する。「西武がある」というのが、地方都市における一種のステータスだと感じていた節もあり、地元の友人や兄弟からは、「これで(まちなかは)本当に終わった」という声が多く聞かれた。しかし、多くの豊橋市民が「まちなかの衰退」を嘆く中、そう思わない人たちもいた。

まちづくりへの目線

「ちゃんと終わらない限り、はじまらない」「ちゃんと終わった」西武の跡で「新しいことがはじまる」という漠然とした期待をもって、このエリアに目を向けてくれていた人たちがいたことが、その後、に続く活動の礎となっていると、今は感謝している。

僕と同じ歳で、市議員をしている岡本泰さんがその一人である。「sebone」のスタート時、僕はまだ東京にいて、設計事務所を辞め、帰郷の準備をしている頃だったため、その成り立ちの詳細については知らない。この連載にあたって、改めてその経緯を聞いた。

2000年代、「中心市街地の衰退」は顕著になり、「シャッター

街」などと揶揄されて、全国的にそのテコ入れ策が論じられていた頃、豊橋においても「西武撤退」はその危機感、不安感に拍車をかける出来事であった。市議の立場から「市役所から見るまちなか」として、いつまでも「駅前がにぎやかでなければ」という意見に違和感があったという。豊橋のような30~40万人都市のまちなかのあり方について、行政は、なんら策を持ってないと感じていた。一方、商工会議所に所属する立場から「商工経済界から見るまちなか」も、「お店でいかにモノが売れるか」という、まちづくりの発想にも限界を感じた。

そんな折に行った商工会議所青年部の「中心市街地活性化」事業企画でのまちなかアンケートで、まちなかでの行動や過ごし方について調べて気づいたのは、「まちなかに来る人が、駅周辺のほんの少しのエリアでしか行動していないこと」であった。豊橋市が定める「中心市街地」は、はるかに広域で、「もっとコンパクトに」「もっと集中しましょう」と提言したが、行政も商工会議所もイザとなると、「そこだけ優先することはできない」となった。このとき、このような思考・組織・構造の中からは新しいことはできない、と強く感じ、既存の団体によらないま



「sebone」にかかわったスタッフたち。水上ビルの前で



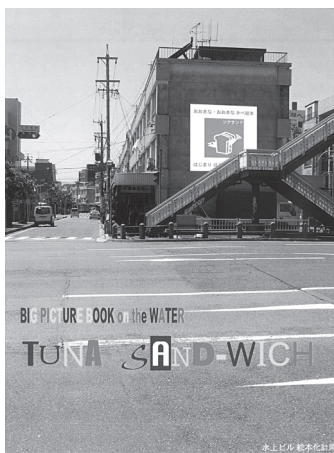
まちなかでのライブペインティング(2014年)



豊橋市のキャラクターも参加(2014年)



左 | 水上ビル (中央) を、はしご車から見下ろす
 中 | 「水上ビル絵本化計画」:
 水上ビルの10面の妻壁に絵本を飾るという企画。初回は、社本善幸さん作「TUNA SAND-WICH」。現在は、「水上ビル壁面アート・トリエンナーレ」として3年ごとに作品募集する企画になっている
 右 | 2004年、第1回「sebone」のチラシ



ちづくりができないだろうか、という思いが、「sebone」へと繋がる。

「マイアミ」の奇跡

最初にしたことは、メンバー集めであった。商工会青年部の後輩で求人誌などを手掛ける鈴木恒安さん(=人を動かし、資金集めができる人)、知人の美術家・社本善幸さん(=アーティスト)、まちなかアンケートをサポートした豊橋技術科学大学の都市計画系ゼミの学生・菊池晃生くん・木下博貴くん(=建築や都市計画など技術的なことが分かる人)と、まちなかで育ち、アートイベントなどのキュレーション経験もある松井香奈枝さんの5人。松井さんとの出会いも、前述のアンケートで、まちなかへの提案的なコメントがびっしり書き込まれていたことが目に留って、連絡を取ったことがきっかけだった。

2003年、季節は春(定かではない)の夕刻、「市民センター」のあるビルの前で待ち合わせ、「マイアミ」という飲食店で、はじめましての5人と、岡本さんが顔を揃える。各自まちなかへの熱い思いを語り合い、西武ビルを使って何かをしよう、とか、跡地への新しい希望など、話題は「駅南エリア」を中心に展開し、「水上ビルって、おもしろいよね」という話にもなったという。曰く「まちなかを俯瞰して見たと

きに余白があると感じた」という駅前大通りの南側のエリア「駅南(えきなん)」について、豊橋一の繁華街の広小路通りに比べ、イベントや行政からの支援や補助などが投入されていないものの、今後さまざまな開発の動きが予見されるエリアとして注目をしたという。水路や鉄道などの交差するこのエリアを、新しく人の流れをつくる場所に変えられる、と思ったそうだ。この1年後の夏7月、最初のアートイベントが開催される。「sebone(せぼね)」とは、水上ビルを「まちなかの背骨」と見立てて、「背骨がしっかりしてれば、しゃんと立てる」という、まちなかへのメッセージである。

アートによるまちづくり

昨年10月から今年2月まで愛知県の「現代アートを活かした地域の魅力づくり」協働ロードマップ策定事業にsebone実行委員会の代表として参加した。ここでの議論は有意義で、多くのことに気づく機会となった。今では多くの地域でアートイベントが行われているが、アートによるまちづくり、アートがまちに出ていくこと自体が、この十数年で興ってきたことであり、まだまださまざまな模索の段階であること、その人材や場所や仕組みも十分でないことなどが議論され、「sebone」での経験や問

題点が、改めて追認された。

「なぜ、アートだったのか?」と岡本さんに聞くと、「まちづくり」を考えたとき、「まちを変える⇒人の考えを変える」、そのためには、今までと違う発想からアプローチしなければ——と優等生的回答の後、役人も商工会系の連中も「わからん」分野で勝負しないと——と本音が漏れた。

僕は、まちなか衰退の理由を「公(おおやけ)の毀損」だと考える。公共の場所を「自分のもののように思う気持ち」が薄れている。彼らが始めたこのアートによるまちづくりの取り組みに賛同できたのは、アートがまちにできることのひとつが、「その場所への気づき」であると思えたからである。

「いつもの場所に今日はアート(作品)があることで、その場所がいつもと違って感じる」。これは、「その場所」が、実は「自分の(大切な)ものであること」に気づくことなのではないかと思う。

都市型アートイベント「sebone」ホームページ
<http://www.seboneart.com/>

くろの・ゆういちろう | 1967年、愛知県豊橋市生まれ。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。1993年より野沢正光建築工房。「いわむらかずお絵本の丘美術館」「長池ネイチャーセンター」などを担当。2003年、同事務所を退所し豊橋へ帰郷。2004年、一級建築士事務所「建築クロノ」を設立。2014年より豊橋技術科学大学建築・都市システム学系非常勤講師。現在、「大豊協同組合」代表理事、アートイベント「sebone」実行委員長、駅前デザイン会議常務理事・事務局などを務める



◎次の掲載は6月号です



「JIA正会員」は全員「登録建築家」に 建築家資格制度について考える <私の意見>

市民や若手に対し、 「建築家」の整備を

1. 「正会員ルート」と「社会制度経由ルート」のどちらかとも問われれば、「正会員ルート」を選びます。「社会制度経由ルート」については、今までの経緯を聞く限りでは、二合意の先行きが不透明で将来実現の可能性が感じられないのがその理由です。会員構成の違いが合意に至らない最大の要因と考えます。ただ、「正会員ルート」が実現した場合は、登録建築家という名称の存在に疑問が残ります。

2. 登録建築家については、JIAの中に正会員と登録建築家の違いが明確でないままに混在していることが、一般市民には分かり難さを感じさせていると思います。一般市民に理解を求めるものとするならば、「正会員ルート」で一本化することはひとつの方法だと思います。しかし、JIA正会員（未整備状態）と登録建築家と建築家の名称の現状を考えれば整理が必要であり、建築家の定義をJIAとして明文化することも必要ではないかと思えます。例えば、「JIA正会員は建築家と称することができる」などとすれば、建築家＝JIA正会員のイメージが一般市民にこれまで以上に理

解を含め伝達することができると思いますし、われわれにとっても説明が容易になると思います。登録建築家制度そのものの存在を含め、再考すべき時期に来ていると思っています。これらはJIAと一般市民および行政との関係をさらに高め、特に一般市民の一助となることを推し進める上で必要なことと思えます。

3. JIA正会員については、現在の正会員には会員規程にある「正会員の有資格者」以外の正会員がいます。一般市民に対してはJIA会員の構成が明解であることが必要であると考え、正しい資格への位置（専門会員、個人協会員）に移行する事務手続き（例えば、通知して自動的に移行する）など、そろそろ期限を定め整備をすべきときだと思います。会計上の問題もあろうかと思えますが、若手の建築士が目指すJIAの建築家像の形成を優先すべきで、このことが将来の会員倍増につながるものと思っているからです。

尾林孝雄 | 尾林建築構造建築事務所（静岡）



現在の問題点と 全員登録建築家になった後の諸問題点

私は建築家資格制度についてお話しする前に、当初からの経緯を考えたいと思います。1997年建築資格制度（素案）がJIA NEWS11月号に公表され、近畿支部と東海支部の静岡地域会において、建築家資格制度の試行が行われました。JIA本部の素案に基づき、UIA（国際建築家連合）の職能実務委員会（PPC）がまとめた「建築実務におけるプロフェッショナリズムの国際推奨基準に関するUIA協定」に準じた内容になっており、教育・実務訓練、資格認定、継続教育の要件を満たすもので、1999年8月21日にJIA近畿支部で「建築家資格制度」がスタートし、自主認定による339人の登録建築家が誕生、支部大会で認証式が行われました。細則が9月1日理事会にて承認され認定要件など明確となり、2003年10月JIA NEWSに、「建築家資格制度一リポート7」が載り、全会員に送られました。そして、2003年12月1日から申請受付が開始され、2004年2月に認定書が送付され、同年4月1日に登録建築家が誕生しました。

その誕生から11年目、素案から18年目に、「建築家資格制度について考える『JIA会員』は全員『登録建築家』に」ということで、芦

原会長から「正会員ルート」の方針が提起され、2014年12月16日にJIA東海支部会員集会在開催されました。

私も概ね賛成ですが、十数年経過しても当初から問題を抱えている状態ではないでしょうか。当協会だけではなく、同時に広い意味での他団体との関係や教育界との関係も重要ではないでしょうか。海外の大学は5年生であるため、わが国では大学院修士6年を5年に読み替えて対応していることから、当協会もどう連携していくか。教育界もJABEEを視野に入れて対応している大学があるように、「正会員ルート」の方向性をしっかりと考えて議論をしてほしい。国家資格には、かなり難しいが段階を経て進むしかないと思います。そのためにも登録建築家として、対外的にも認識してもらえよう意識をもって活動していかなくてはならないと考えます。10年経過した問題点とJIA正会員が全員登録建築家となった以降をどうしていくかの議論が必要と考えます。

加藤幸治 | 一級建築士事務所 加藤計画工房（岐阜）



「建築家とは」の問い、 ひとりひとりが判断を

公益社団法人になってほぼ2年。3年目を迎える年に「JIA正会員」を全員「登録建築家」に！ということで検討が進められています。この件は、そもそも建築家を国家資格とすることを目指す道筋のひとつとして提案されたものです。そしてこれは芦原会長のJIAの現状への強い危機感の表れなのではないかと感じました。

私は2003年に入会したのですが、そのときの規約に（今でもありますが）会員のCPDの履修単位が3年で108単位とされていました。しかし、それが現実には運用されておらず、できて間もない規約がすでに形骸化していることに驚きました。果たしてこういった状況のなかでこれだけの決断をし、そのシステムを貫き通せるのか？と少なからず不安を持っています。また、「登録建築家」を第三者の認定機関と位置付ける中で、こちらの都合でCPDの必要履修単位数を減らそうとしているというのも第三者性に対して疑問を持ちます。

とは言うものの、この制度の変革の提案を機にこうしてみんなで議論して、次のステップに進もうとすることは素晴らしいこと

だと思います。社会に必要とされる「建築家」とは何か、私たちはどこに向かって進んでいけば良いのか？これはJIAの歴史の中でずっと問い続けられているテーマだと思いますが、結成して二十数年経つ今、ここにいる私たち自身であらためて考えなければならぬ問題なのではないでしょうか。

また、自分たちの意思を社会に伝えていく戦略も周到に練っていくことが大切です。JIAは純粋な思いで建築に取り組んでいる方ばかりだと感じていますが、それとは別にしたたかに世の中を動かしていくことも重要です。この辺りがとても苦手な組織だと自省の念も込めて感じています。

今回の制度改革は一般の方々から見て分かりやすいものであってほしいですし、制度を広く情報発信することによって多くの共感を得られるものであってほしい。

この春には、ひとりひとりの決断が迫られることになるでしょう。その判断のための十分な材料を皆さんはお持ちですか？自分にも問い続けていますが、とても難しい選択となりそうです。



中西修一 | shu建築設計事務所（三重）

まず、制度のUIAアコードへの適合と CPDの義務化をすべき

建築家資格制度の確立を目指してきたJIAは、まず制度の根幹をなす「継続職能研修（以下「CPD」という）」の試行を2000年に開始し、2年後の2002年に本格的に施行した。これまで試行期間を含めると約15年経過したことになる。一方、2004年にJIA独自に立ち上げた「建築家資格制度」（登録建築家）は11年目を迎えている。発足当時、いずれも早計だ準備不足だとのそしりを受けたが、これだけの実績を前に、さすがに内部では異論を唱える人はあっても、否定するまでには至っていないのではなかろうか。少なくとも建築設計業界では社会的にその存在は認知されている。このJIAの活動は大いに評価されるものである。

しかしJIAはここで二つの過ちを犯しているということ、自責の念を込めて申し上げなくてはならない。一つは「CPD」に関して、当初から実質的には義務化を外した運用を容認してきたことである。もう一つはUIAアコードに適合した資格制度として発足したはずの「建築家資格制度」が、部分的であれUIAの基準に適合していない部分があり、それを改善、修正せずに放置して

きたことにある。いずれも主たる原因が会員数の減少を危惧しての処置のようであるが、今こそJIAの目指したところを再確認し、基本路線に戻す決意と努力が必要ではなかろうか。

したがって、今やらなくてはならないことは、「建築家資格制度」をUIAアコードに適合したものに改定することと、同時に「CPD」を会員義務とすることである。そうすればこれまでJIAが定款上の正会員の資格要件にある「建築家」を定義してこなかったところを「登録建築家」と読み替えるのに論をまたないであろう。

ようやく、専門の登録建築家が組織する公益社団法人としてのJIAの存在が明確になるのではなかろうか。将来、登録建築家が国家資格（呼称はどうなるのか？）に包含されることになっても、JIAはその存在を顕示することが可能であろう。



森口雅文 | 伊藤建築設計事務所（愛知）

この企画は、東海の建築のこれからの発展のため、東海の若手建築家たちがこの地域の行政とのかかわり方やプロポーザルのあり方を分析し、地域社会における建築の役割がどうあるべきかを提言するものです。今号は、2014年愛知県美浜町で行われた町営住宅のプロポーザルで最優秀賞に選ばれたstudio velocity一級建築士事務所(岡崎市)の栗原健太郎氏、岩月美穂氏、そして「美浜町住生活基本計画」の作成を支援した都市研究所スペースシア(名古屋市)の石田富男氏の対談を掲載します。

栗原 まず石田さんのご活動の内容をご紹介ください。

石田 私どもは都市計画のコンサルタントです。市町村などから委託を受けて都市計画やまちづくりに対する調査をしたり、その計画づくりのお手伝いしたりするわけです。その一つに住宅分野のサポートがあり、マスタープランの作成もしています。国の「住生活基本計画」(全国計画)を受けて愛知県の計画作成のお手伝いもさせていただきました。市町村は義務ではないのですが、重要であるということで市町村の住生活基本計画のためのガイドライン作成もしています。こうした計画をつくるにあたって、入札では良い提案が出てこないのではないか、むしろ計画策定の段階で作成者のプロポーザルをやるべきだと、ガイドラインの中に書かせてもらったのです。実際そのとおりにプロポーザルをされたのは県内では美浜町さんだけです。やはりプロポーザルは時間と手間がかかり避けられる傾向があると思います。うちも指名に入れていただいて選んでいただいた。それで「美浜町住生活基本計画 2011-2020」の作成をお手伝いすることになったのです。

その中で、まちの魅力発信や空き家活用など重点プロジェクトをいくつか設定したのですが、そのうち一つが、モデル町営住宅プロジェクトでした。私は、木造都市研究会「木愛の会」にかかわっていますが、これはコンクリート建築中心のまちの在り方を見直し、木造建築の良さをまちなかで考えていこうという活動であり、公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律が出されたこともあって、今回の建て替えも木造でと提案させていただきました。うちが選ばれたのがプロポーザルですので、設計者選定もプロポーザルでと提案し位置付けていただきました。

栗原 町営住宅の設計プロポーザルの前に、まちの将来を決める指針がプロポーザルで決められていたわけですね。もし入札で計画作成者が選ばれていた場合、建築はプロポーザルという流れになるのでしょうか。

石田 ちょっと分からないですね。実は私、建築設計のプロポーザルには初めてかかわりましたので、逆に反省する点もいくつかあるのです。

栗原 美浜町住生活基本計画はすべて読んだのですが、時間をかけてリサーチされ多岐にわたって現状分析されており、まちの将来像について方針がしっかり立てられていたので、設計する側としてはこれを信じて、書いてあることを実現するように図面化していこう、と思ったのを覚えています。

「住宅の経験があればよい」は町の意向

栗原 設計のプロポーザルの審査員の先生方はどのように決まったのでしょうか。

石田 全体の構成として学識者はこんな割合でと話をさせてもらい、地元の方は基本的には町のほうで決めていただきました。美浜町には日本福祉大学がありますので、そこからお一人参加していただき、名古屋大学の小松尚先生は審査員の経験も豊富で私がよく存じ上げていたということもあり推薦しました。あと女性ということで、名城大学の生田京子先生ですが、2010年の愛知建築士会の学生コンペで「美浜で暮らす」というテーマのときに審査員でいらした。そういう経緯があり、お願いすることになりました。このコンペは毎年場所を変えて行われていますが、美浜が対象となったのも町の担当者の方の働きかけがあったと聞いています。

栗原 そういった意識が高いというか、新しいことにチャレンジする精神がある方が行政にいらっしゃるといいのでしょうか。

石田 そうですね。今回のプロポーザルの参加要件はかなり門戸が広がったのですが、実は最初は15戸ぐらいの共同住宅の経験があったほうがよいのではないかと話も出ていたのです。でもそれを取り払ったのは町なのです。もともと木造3階建てで計画されていたのを、町長が、平屋がいいんじゃないかとおっしゃって、平屋だったら住宅設計の経験だけでいいということになりました。この柔軟性はすごいなと思いました。

栗原 そうでしたか。住生活基本計画では、プロジェクトの展望として「木造3階建てに建て替えることを検討」と明記されていますが、要項をつくる時に平屋が変わったのですね。

石田 平屋のほうがコストがかからないという考えもあったかもしれませんが。自治体の財政が厳しくなると、われわれのような調査や計画づくりの仕事はすぐ影響が出ます。昔だとまちの将来を考える計画にはしっかり予算をつけて検討して、というふう

❖「美浜町管河和団地基本設計業務委託のプロポーザル」

愛知県美浜町における町営団地の建て替え。2014年8月に審査が行われた。参加要件の中で経験を問う項目は「居住施設（共同住宅、戸建住宅、併用住宅などどんな形態でもよい）にかかる設計業務を元請けとして履行した実績を有するものであること」だけだった。審査員（敬称略）：小松尚（名古屋大学大学院准教授・委員長）、児玉善郎（日本福祉大学教授）、生田京子（名城大学准教授）、美浜町副町長、同町建設部都市計画課課長

だったのが、いかに少ない予算でやるかに変わってしまう。

栗原 入札になる理由として、冒頭におっしゃったように、手間が少ないということに加えて、予算的なことの2点があるのかもしれないですね。

石田 本当にまちの将来のことを考えたら、つくる段階で手間をかけて良いものをしっかりつくっておけば、結果的に長持ちして維持管理費も少なくすむと思うのですが、当面の予算で動いてしまうところがある。この辺が今非常に問題という気がします。

栗原 今回もそうですが、高度経済成長期に建てられた建物がそろそろ耐用年数にきている、今後大きい問題の一つですよ。

岩月 今、土地一画に同じような建物をつくったりとか、人と人とかかわり合いなどもあまり重視してつくられていないような風景が広がってきているのが悲しいです。できるだけ時間をかけて、みんなの記憶に残るようなものをつくっていきたいと思っています。

石田 私も仕事柄、いろいろな町を調査で回るので、派手な色の家も結構ありますね。本人はいいと思っているのですが残念な気がします。

岩月 クライアントさんのほうにそういう気持ちがあっても、つくる建築家の側が意識を持てば改善していけることなのかなと思います。本当に、若手建築家がそこにどうかかわっていくか。あと教育もすごく大切なことだと思うのです。

美浜の未来につながる町営住宅をつくりたい

栗原 美浜町の少子高齢化は日本全国の平均のそれよりも進んでいるようで、確かに既存の団地は高齢者の方が多いのですが、今回のプロポーザルの要項では、なるべく子育て世代、若い人も入れるような建物にしていこうと書かれていました。私は美浜町に2週間に1回は行っていますが、海に近いから食べ物もおいしいですし、環境がいい。公営住宅でその良さを表現することは難しいかもしれませんが、高齢の人はもちろん若い人も住みたくなるような、これまでの団地というイメージとは違うものを目指そうという町の意識を感じるので、そういった建築ができればいいなと思ってやっているとところです。

石田 今回、美浜らしさということで、「黒壁」の提案をされた応募者も多かったようですが、そういう従来のイメージだけでなく、美浜の風景になじみつつ、若い人たちに新しく提案していくようなデザイン性も求められていて、それが今回栗原さんたちが選ばれた理由かなと思っています。



石田富男氏



栗原健太郎氏



岩月美穂氏

岩月 私たちも、鏡囲いの壁のイメージで寝室のコアと水回りのコアのところをぐるっと木を使った下見張りにしたいと思っています。予算的には厳しいかもしれませんが。でも木の外壁にすることで風合いがでたり、そこに生活道具を掛けておく仕掛けをつくったり、住んでいる人の生活感がにじみ出るようなものになっていくといいかなと考えています。

石田 そこはご提案の大事な部分ですよ。先ほど言った私の反省点ともいえるところがそれです。プロポーザルの案を実現する予算をきちんと確保すること、それを町にしっかり確認すべきでした。

岩月 予算というのは本当に難しいのですが、それも含めてどれだけ良いものがつくれるかというところで、若手建築家が頑張っていけばいいなと思っています。もし予算が少なくなったとしても、こうしたチャンスはなくしてもらわないように、これからもプロポーザルが行われていくといいと思います。行政や住民の皆さんと建物と一緒につくっていくという経験があるだけで建築家の将来も変わってくると思います。

栗原 公共の建物をやらせていただいて良い経験とし、それをまた公共に返すという意味でその技術を地域で使う、そういうふうになれば一番いいなと思っています。そういう意味ではすごいチャンスを与えていただき、頑張ろうと思っています。美浜町の未来につながるようなものになるように奮闘していきたい。

岩月 私たちはこれまで個人住宅や店舗の設計が中心でした。その際気をつけているのが、当たり前のことかもしれませんが、クライアントの要望を聞き、今生活で困っていることや悩みに耳を傾け、受け皿となることです。私たちは周辺環境や風土などを考えながらスタディをして、住む人たちにあった住まいや暮らし方を提案してきました。この町営住宅の設計もそうした延長線上にあると考えています。審査員の先生方や職人さんの意見、また役場の方の悩みやメンテナンスの相談なども受けながら、周辺の環境や風土を感じ取り、みんなで何度も話し合っていけば、もっと良い方向に改善でき、よい建築ができと思っています。そこに建築家としての大切な役割があるのではないのでしょうか。

石田 ここが注目されて、じゃあうちでもやってみようかと、よその自治体でも思われることが重要ですね。まちの人たちに受け入れられ、まちの風景としてみんなに愛される、そういう建築をつくってほしいなと思います。

栗原 今日はありがとうございました。

忘れられない建築 in 京都

去る2月14日午前7時30分、予定通り参加者29名を乗せたバスは、快晴の中、京都に向けて名古屋西口を出発しました。

聴竹居→大山崎山荘→東華菜館（昼食）→宝ヶ池国際会議場→旧宝ヶ池プリンスホテルを巡るメニュー盛りだくさんの日帰り研修ツアーでした。年月を経てその凄さを増す建築。昨今の建築雑誌では見ることができなくなったその魅力を参加者皆様方に体験いただきたいとの思いで企画しました。

京都も天気恵まれ小春日和の中、各施設を巡り、集合時間の厳守など皆様方のご協力もあり、全員無事に予定時間通り名古屋に帰ってこることができました。どうもありがとうございました。企画スタッフの皆様、お疲れ様でした。感謝です。

各施設の感想は、参加者皆様の以下のレポートをご覧ください。

島山成好 | 島山都市建築事務所



国立京都国際会館にて

■聴竹居

建築家藤井厚二氏の5番目の自邸は、環境共生住宅としてでなく木造モダン建築としても、予想以上に完成度の高い素晴らしい住宅でした。昭和3年にできたこの住宅は、今でも古さを感じさせない繊細な設計、職人技の高さ、そして日本の四季の移ろいを取り込み、「美」にこだわり抜いた名建築です。

この建築家が恵まれた環境であったことは別の次元で、「建築」に対する探究心と信念がいたるところから溢れる建物で、可視的ディテールの向こうにある建築家魂を見せつけられ、久しぶりに心地よい衝撃を受けることができました。

風土に呼応し、意匠・構造・設備を研究、考察した設計は、日本文化を顧みると至極正統で、日本人の感性に心地よく受け入れられる本来の姿なのではないかと感じました。そのような感性が、未来の日本の住宅文化へつながっていくことを期待せずにいられません。

建築家が、単に知識と経験を積み重ねるのではなく、芸術・芸能に精通していたからこそ、この「機能と意匠」があるというディテールもあちこちに確認することができ、自身を叱咤することができました。またあらためて、四季折々ゆっくりと訪れたいと思いつつ、次の見学地へ向かいました。

関戸隆久 | I.P.U建築計画



■大山崎山荘

京都府乙訓郡大山崎町、天王山山麓、淀川の流れを見下ろす風光明媚な場所に、大正から昭和初期にかけて実業家の加賀正太郎の手で英国風の山荘が建てられました。消滅の危機などの苦難の時期を乗り越え、地域住民、京都府、大山崎町の協力で保存整備され、安藤忠雄により、設計期間1991年4月～1994年7月、施工期間1994年8月～翌年7月で、美術館として再生され、周囲との景観との調和をはかるため新しい建物は地下に計画されました。

国の登録文化財である山荘部分は1996年に保存修復され美術館として開館。われわれが訪れた日も厳しい寒さの中、多くの来館者で賑わっていました。

また、睡蓮池の向こうに四角形の山手館が2012年に新しく開館しました。温室へ続くガラス屋根の通路を通り睡蓮池を眺めながらの安藤流の「道」の演出を体感し、次の「場（間）」へと導かれアートの世界へと溶け込んでいきます。ただ、円形の地中館に「睡蓮」の作品が展示された壁面が、開館当初は打ち放しのR曲面であったのが、多角形の面で内装処理をされていたのに違和感を覚えたのは私だけかなと思ひ、山荘をあとにしました。

JIAの先輩の方々、仲間たちに笑顔で迎えられる、感謝しています。ありがとうございました。

後藤晃範 | 圓空間設計工房
愛知建築士会



聴竹居 外観



同 内部



大山崎山荘



同 地中館



東華菜館

■東華菜館

歴史と風情あふれる街京都の中で、最も人通りの多い場所の一つである四条通りと鴨川の交差点、日本最古の劇場南座を望む場所にその建物はあります。大正15(1926)年竣工で、ウィリアム・メレル・ヴォーリズ的设计によるものです。建物全体に過剰なほどの装飾があるのが特徴で、スパニッシュバロックと呼ばれる様式となっています。もともとは当時ブームであったビアホールをイメージして建てられた西洋料理店でしたが、昭和20(1945)年末に「東華菜館」として生まれ変わりました。

建物には1924年 OTIS 製で、日本に現存する最古のエレベーターが今も稼働しており、これを目当てに訪れる客も多いとのこと。鑑戸の開閉をしてくれるエレベーターボーイがおり、屋上には教会の鐘楼のようにデザインされたエレベーターのマシンルームがあります。また、建物内部には今では製作が困難であろうと思えるような装飾が多数散りばめられ、それらオリジナルのものをできるだけ生かしながら、現在も中華レストランとして利用されています。床の木製のパーケットタイルが竣工当時のままで、今でも十分に利用できていることには驚きでした。

川床や屋上のビアガーデンもあり、次回は、近くにある祇園や八坂神社、四条通り散策の後に、水餃子でビールだなぁと思いました。

勝濱大輔 | 勝濱建築研究所



■国立京都国際会館

ニューヨークの国連総会議場のような国際会議のための建築を日本にもつくろうという構想のもと、1963年、国によるわが国で初めての公開設計競技が行われ、195の応募作品の中から選ばれたのが、この大谷幸夫(1924～2013)の作品である。コンペ要項には「世界に誇るに足る優れた造形作品であることが要求される」と記されていた。

1966年5月に開館、その後1973年、1985年、1998年の3回増築されている。印象的な台形と逆台形の空間の組み合わせで形づくられ、合掌造りか神社の社殿をほうふつとさせる、日本の伝統様式をモチーフとした建物である。このような形は宝ヶ池や周辺の自然との応答を介して導き出されたものであるという。最近改修工事が行われたようで、汚れはほとんど気にならなかった。今思えばうかつなことに、私はこれまで訪れたことがなかったので、今回の見学会で最も期待した建物であった。

しかしこれだけの施設を見学するにはあまりに時間が少なかった。メインの大会議場は使用中で見られなかった。メインラウンジはもう少し時間をかけて空間を体験したかった。建物全体を周辺からも眺めてみたい。これは1日か、半日たっぷり時間をかけて、内外とも、ゆっくりと味わいたい建築である。

山上 薫 | 山上建築設計



■旧宝ヶ池プリンスホテル

見学地の最終が、村野藤吾氏の基本設計による、1986年開業の旧宝ヶ池プリンスホテル(現、グランドプリンスホテル京都)。この前に見学した、国立京都国際会館と道路を挟んで建っているため、そこから山を背景にして緑に囲まれた、遠景の外観を望むことができた。円形のドーナツのような形は、中国福建省にある世界遺産、客家(はっか)人の福建土楼を思い出す(複数の家族の居住空間、また家族を守るための要塞)。ホテルには、中庭を取り囲むように309室の客室、4種のレストランや宴会場、カフェ、バー、美容室、スパ、ニアショップなどが備えられ、平屋の車寄せからエントランスに向かう左手には池を挟んで、茶室(茶寮)がひっそりと佇んでいる。普段は見られない数寄屋造りの茶室は意外と広く、個室が2室(16畳、8畳)、茶室(4.5畳)がある。茶室から池越しに見る外観は、車寄せに支えられ重厚さに溢れていた。

ロビーから地下への楕円形の吹き抜けに、エスカレーターとアールの階段があり、2本の円柱の柱頭にある照明器具が雰囲気を高めている。楕円形の中庭では、ガーデンウェディングを催すことができる。周囲の自然環境豊かな景観に京都国際会館とは対照的な、緩やかな曲線がなじんでいた。

田中英彦 | 連空間都市設計事務所



東華菜館 内部



国立京都国際会館 メインラウンジ



旧宝ヶ池プリンスホテル



同ホテル、数寄屋造りの茶室

伊礼智氏「設計の標準化から生まれる家づくり」

タイトルからしてどうしてもありきたりな設計を思い浮かべてしまいます。省力化、コスト削減のための画一化ととらえられ、建築家としてのプライドを持った設計者としては踏み込みたくない領域です。

建築における設計という行為は、その人となり(キャラクター)が前面に押し出されるパフォーマンスであると思います。すべての条件を踏まえてどう料理するのかは、設計者の人格や品格が表れる行為であるともいえるでしょう。何かしら感じるところのある建築は、プランにおいても空間のとらえ方がしっかりしており、外観の佇まいにしても、一見して誰の仕事か分かるものが多いことに気付きます。

それが作風という言葉で表わされるのであれば、そこに仕事の質を上げ、完成度を高める標準化の行為が表れている、それが意図的であるか否かにかかわらず、と伊礼氏は述べられています。

以下、伊礼氏の講演会の内容と著書を参考にしてまとめてみました。

設計の標準化を考えるきっかけは、10年余りに手掛けた17区画の建売分譲住宅プロジェクトに携わったことであった。OMソーラーを組み込んで、自然素材に包まれた低層集合住宅タウンとつくろうというコンセプトである。しかしそこにはコストの問題がついて回る。安くなければ、どんな良いものでもダメだということであった。結果的には相場よりも900万円ほど高くなったが、完売できたのは、5回ほど催したシリーズセミナーで「心地良い住まい」について伝えたからであろう。

この経験を通して、どんな物件でも時間と予算とそれに矛盾する要求内容がタ

イトに絡み合っていることは当たり前であり、そんな中で仕事の質を高め、クライアントはもちろん社会からも信頼される確実な仕事をするために、プランや納まりや素材などのルールづくりを進めることを学んだ。

それは創造的設計行為を退化させることではなく、より確かにしていく手法である。採用した内容に磨きをかけ続けて次なるベースとし、常に新しいケースに挑戦していくことが大切である。ファッションに例えるなら、「オートクチュール」(特注品)でなく、「プレタポルテ」(リーズナブルな既成品)的な家づくりの感覚である。無駄を省くこと、標準化により仕事をスピードアップすること、価格を設計早期に把握し、自信を持って施主に伝えること。それはより良い信頼関係にもつながっていく。

よって、予算・時間・性能の面から標準化できるところはすべきであるが、具体的には造作の納まり的な部分は、単発の標準化ではその取り合いのところで問題が発生する。それを解決するためにまずは玄関、浴室、階段などをそれぞれ一坪の大きさとまとめることが有効であるとの結論に至った。例えば階段のパターンは「回り階段」「直階段」の二つにする。これをベースに改良を加えつつ、それに伴っていろいろなバリエーションが増えていった。階段にトイレ、勝手口とパントリー、玄関と収納というように増えていくことで、プランニングの自由度が増すのである。さらに仕上げ、建具(金物を含む)などの標準化を進めながら、雨樋や玄関木製引戸、ハーフユニットバスの開発にも携わるようになった。これによって設計の標準化だけでなく、そのための組織づくりの必要



講演会の様子

性も感じている。

以上が実例を踏まえての大筋の講演内容でした。まず大切なのはやはり、その敷地と設計条件からのプランニングであると感じました。それは平面の中に矩計的、立面的、インテリア的、納まりの要素や空間のボリュームや各プロポーションの感覚がすべて投影された平面図のことで、その大前提があってこそその積極的な「標準化」であると思います。

そしてできるだけ小さくまとめる。決して狭い家ではなく、居場所があればよいのであって、生活を見直し整理して、例えば回れる動線を取り入れて、よく練った設計を目指したい。それは最小限のお気に入りの中で暮らす精神的な豊かさにもつながると思います。

伊礼氏の作品は、ヒューマンスケールから出された優しさ、特に高さの感覚が特徴的です。住宅の佇まいが風景となる美しさを追求していると思います。特に印象的だったのは、必要最小限に抑えた天井の高さの気持ち良さ、あるべきところ(例えば遠くを見渡せるところ)の窓のしつらえ方でした。

ある作品のリビングの画像では「天井高2,100にしたところ、竣工時に施主から低いのではないかと感想がありました」と。例えば図面の段階でその気持ちの良さを説明したとしても完成時におけるこの手のコメントは常々冷や汗ものです。しかし伊礼さんの言い訳コメントがとても素敵でした。「気のせいですよ。すぐに慣れますから(笑)」。いつか自分も言ってみたいセリフのおみやげをいただきました。



高橋雅志 | 高橋設計事務所

三分一博志氏 「地球のディテール」

JIA 三重の毎年恒例の建築文化講演会は、2月7日、津市アストプラザの4階アストホールで開催された。三分一博志建築設計事務所代表、三分一博志氏をお迎えした今回の講演は、「地球のディテール」という演題で行われた。氏は、1992年東京理科大学理工学部建築学科卒業後、小川晋一アトリエを経て、1997年三分一博志建築設計事務所を設立。現在、デンマーク王立芸術アカデミー教授も務めている。国内のみならず、海外での評価も非常に高い建築家の一人である。

今回の講演は、実作の紹介や説明をされながら、環境と建築について話され、「地球のディテール」というスケール感のある言葉を用いて静かにゆっくりと語られた。

建築は、地上や地中に一定のバランスを持って定着することが望ましいのではないか？

確かに、植物は、無理なくその環境に順応し大地に定着している。聴講する私は、日常において、植物と大地と環境についての関係を意識し深く考察してきただろうか？

日向と日陰、南斜面と北斜面、当然植生が異なることは自明であるが、植生が異なりながらも、それぞれの植物は、その環境に応じて大地に定着し、根を張り生存している。

では、「地球のディテール」となり得る建築とはどのような手法で成り立つのである

うか？

氏の言う手法は「エナジースケープ」という言葉を用い説明された。

循環する地球のエネルギーがもたらす景色、あるいは循環そのもののプロセスを言い、例えば紅葉や雪景色などであり、ただ単に自然が生み出すものだけが「エナジースケープ」と定義されるものではなく、そのエネルギー循環サイクルに順応しているものであれば、人為的な風景も含める、と言う。

例えば、山に降った雨が、地形の高低差にそって流れていくことから、水の位置エネルギーを利用した棚田として成り立つことを、地形の断面スケッチや写真などで具体的に説明された。

建築は「エナジースケープ」と一体になることにより、「地球のディテール」として地球にも人にも認められ、持続的に美しい風景となるのではないかと話された。

無理のない、そして言葉を選びながら、心地良くゆっくりと話されていく…。

アストホール会場が、よどみのない清々しい山里の緑の空間へと変わっていくように思えた。

紹介された実作の中で、特に代表作と言われている、犬島製錬所美術館（2008年、岡山県）は、銅の製錬所跡にある。明治時代に人為的に造られた、煙突や崩れ落ちた建築群が、その島の地形や自然環境などの環境

特性ととらえられ、自然の一部として、あるいは熱エネルギーの集積場所（チムニーホール）として客観的・合理的にその計画に取り込まれてい

る。銅の精錬により副産物として廃棄されてきた17,000個の「カラミレンガ」を採集し、建築マテリアルとしての再利用が、犬島精錬所のDNAとして歴史的存在感を示す一つとなっている。

佐賀・有田焼の焼窯副産物利用のトンバイ堀も街並み景観形成の上で重要な歴史的マテリアルとなっていることを思い浮かべた。

三分一氏の建築は、非常に緻密に長い時間をかけた、客観的な観察と観測により、解を求めた結果生まれるものとしたら、合理的かつ客観的に計画されたはずなのに、なぜ、このように素晴らしい形態や空間を併せ持つデザインを実現させることになるのであろうか？

氏の優れた観察力から生まれる創造力、人間をも地球のマテリアルととらえる概念は、地球に生きる生物の等価性にまで及び、結果として、尋常ではないオリジナリティに溢れた建築が生まれてくるのではないかと考える。

最後に三分一氏は語った。

建築は人々に認めてもらえなくてはいけないと思っている。人は、それぞれの土地、生まれ育った故郷などに敬意と愛着を持って生きている。そしてその場所に存在する美しさ、豊かさをよく知っている。だから、建築がその場所特有のエナジースケープとして地球の一部となり得れば、人びとが求めているものに近づいていくと信じている。

「地球にも人にも認めてもらえる建築」、これが今の私の目指す建築である。



会場の様子



三分一博志氏



宮原良雄 |
宮原良雄建築設計事務所

木に向ける視線と 森に向ける視線 ①

tele-design collaboration network
名古屋市立大学大学院 芸術工学研究科 准教授 久野紀光



仏教は、大乘仏教と小乗仏教（最近では上座部仏教とされているらしい）に大別されるという。筆者は無信教者なため、詳しくは宗教学の専門書に拠っていただきたいが、大雑把に云えば、公の幸福がひいては個の幸福に至るといふ大乘仏教に対して、まず個の幸福があって初めて公の幸福に至るといふ考え方が小乗仏教だそうだ。

幼い頃より、「滅私奉公」を尊ぶべきという躰を受けてきた筆者にとっては、個の幸福を優先する小乗仏教の考え方に馴染めずにいたが、2011年3月11日から今日までの被災地を実見するにつれ、身に染みついた躰すら正しいのか分からなくなってきた。

震災発生直後に、盟友の槻橋修（建築家、神戸大学准教授）と電話で意見交換した。さまざまな言葉を交わしたが、主旨は「我々に何ができるだろう？」という青臭い衝動に尽きたと記憶する。唯一明確に覚えているのは、「この災害がなぜ起きたのかは研究者が解明していくだろう。どれほどの惨事なのかはメディアが伝えるだろう。でも、この災害で一体どんな街が失われたのかは誰が記録するのだろうか？」といった内容を、どちらともなく口にしたことだ。幸いにして、建築設計を生業としている我々は、模型制作の基本的能力を日々培ってきている。ならばこの

能力を活用して、在りし日の街を模型で復元してみようだろうか、と。

こうして始めたのが「失われた街～模型復元プロジェクト」だ。まずはTOTOギャラリー・間の協力を得ながら、全国13大学の研究室と協働して14の街を縮尺1:500で1m四方の模型を制作し、続いて東京都現代美術館の協力を得ながら、全国15大学の研究室と協働して新たに三陸の11の集落や街を同じ縮尺で巨大な模型を制作した。もちろん、先にも記したように衝動的な想いから始めたプロジェクトであったため、この作業にどのような意味があるのか、明確な答えを見据えていたわけではない。むしろ大変デリケートな側面すらあるため、これらの模型は全て可能な限り感情を抜き取り特別な意図を込めないことにこそ、細心の注意を払うべきだと考えた。これが模型を白模型で制作した理由だ。

実際に制作を始めると、愕然とすることが次々と起こった。まず、あまりに膨大な被災範囲に呆然とし、模型復元エリアを絞るのすら難しい。さらに、制作のベースとなる地図や空撮画像では情報が2次元化されているため、各々の建物が何層なのか、軒の出はどれほどなのか、といった街を印象付ける重要な情報が捨象されている。もちろん、現地に赴き踏査するも

のの眼前に「在りし日の街」はなく、この種の情報の補完は限られる。

それでも被災地に何度も足を運び、わずかな街の記憶の欠片を取材し、役場などに残る祭の風景写真などを閲覧させていただきながら、なんとか3次元の街を立ち上げるに至った。それゆえ、これらの模型が正しく「失われた街」を復元できたと言い切る自信はなかった。

釜石を踏査中に筆者はある漁師の方に声をかけられた。数分の立ち話の別れ際にこの方が話された言葉がいまでも耳にこびりついている。曰く、「なんかさ、きっと偉い学者先生や国や役人さんが、デカイ堤防を建てたり、俺らの住まい高いところに造り直してさ、街のみんなの安全を確保してくれるんだらうね。でも、そうして命を守ってくれることはありがたいけれど、俺らは海に育てられ海を職場にしているんだよ。海から遠のいて住むってことは、生きがいを失うことになるわけよ。命はあるけど生きがいをなくしちゃったらさ、どうしたら良いんだらうね？ デカイ堤防で、川が海に山の栄養分を運ばなくなっちゃったら、（養殖の）牡蠣も痩せちゃうだらうし。俺はこの歳だし、死ぬまで海の近くで海の色をみながら漁師したいよ」。

街の皆の命を守ってこそという大乘仏教の下で動く大きな事業と、海に寄り添ってこそ個々の生きがいを見出すという小乗仏教から発せられる小さな声。森に向ける視線と木に向ける視線の、どちらに重きを置くのが正しいのか？

恐らく正解などないが、少なくとも筆者がもっと多くの街の方々の声を聞き続けねばならないことだけは間違いなさそうだ。

（②は5月号に掲載予定です）



釜石市での踏査風景



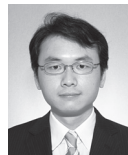
復元模型の製作風景



模型復元された釜石市
(TOTO ギャラリー・間「311 失われた街展」展示模型)

「南海トラフ巨大地震」の 経済被害想定が意味するもの

名古屋大学減災連携研究センター 地域社会減災計画寄附研究部門助教 山崎 雅人



2013年3月18日、中央防災会議は「南海トラフ巨大地震」で想定される経済被害額を公表した(※1)。公表翌日の新聞紙面には「220兆円」という金額が大々的に掲載されたが、被害額の詳しい内訳や意味するところが社会で共有されているとはいえず、膨大な金額が独り歩きしているように思われる。巨大地震の経済被害額を予測することは今でも挑戦的な研究課題である。その意味において中央防災会議が想定する被害額の数字だけを見ても得るものは少ない。大切なことは想定された経済被害の中身を確認し、さらに自分自身でも想定してみることである。これによりはじめて「220兆円」という膨大な数字を自分自身にも降りかかる具体的な問題に変換することができる。経済被害想定を行う真の理由は、起こりえる経済被害を想定し、事前に対策を打ち、巨大地震から幸いにも生き残った人々の生活再建を助けることにある。巨大地震では企業倒産や失業、二重債務などのさまざまな経済被害が起こる。生き残ったことを後悔する人が現われては、防災・減災の意義も薄れてしまう。その意味で経済被害想定は被害額の計算でとどまっていけないのである。



さて、ここで中央防災会議の「南海トラフ巨大地震」の経済被害想定について、その中身をやや詳しく見てみる。経済被害は「資産等の被害【被災地】」と「経済活動への影響【全国】」の2つの項目に分けられている。「資産等の被害【被災地】」とは、被災建築物の復旧に必要な費用の積算として計算されており、これは官民合わせた復旧費用の概算と解釈できる。一方の「経済活動への影響【全国】」は、地震に

よって生産活動が停滞し実現しなかった付加価値(GDP)を意味する。「南海トラフ巨大地震」の被害額はいわゆる「陸側ケース」の場合に最大となり、「資産等の被害【被災地】」は約169.5兆円、「経済活動への影響【全国】」は50.8兆円と達すると想定されている。本稿では前者の「資産等の被害【被災地】」、つまり復旧費用に焦点を絞る。最大約169.5兆円という数字だけからは何も得るものはない。東日本大震災の教訓に学びながらその意味するところをより掘り下げてみよう。

「南海トラフ巨大地震」の復旧費用を考える際に前提とすべきことがある。それはもはや日本政府に巨額の復旧費用を支出する能力はないことである。現在日本政府の一般会計の約半分は借金で賄われており、累積債務は1000兆円を超え、毎年巨額の利払いに予算を支出している。169.5兆円の内訳には民間の建築物復旧費用も含まれるため、169.5兆円のすべてを政府が支払うわけではない。しかし日本政府の財政のひっ迫が改善される見通しはなく、「南海トラフ巨大地震」が発生した場合には限られた範囲での復旧・復興を余儀なくされるであろう。つまり復旧・復興を断念してもらって地域が出るということが考えられる。

問題は政府の財源だけでない。東日本大震災の復興では、財源は確保できても復旧・復興を担う人材が不足し復興にかかわる事業が進まない事例が出ている。例えば建設躯体工事にかかわる人材の有効求人倍率は2014年の間は約7倍で推移している。高騰した人件費により被災地では事業の入札不調が続出している。今後、公共事業の縮小と少子高齢化によりますます建設業で職人は減少する。財源

不足だけでなく人材不足も想定しなければならない。さらに追加される「不足」は「計画不足」である。平成23年度に組まれた復興関係補正予算の執行率を見ると公共事業関連費で20%から50%台と低い水準となっている。主たる理由として、予算は措置されたものの復旧工事や復興計画にかかわる住民の合意形成が進まず、多くの事業が実施されなかったことが挙げられる。想定される被災者数が、東日本大震災の被災者よりも圧倒的に多い「南海トラフ巨大地震」において、復興に向けた住民の合意形成はより難しいものとなる。財源不足、人材不足、計画不足は「南海トラフ巨大地震」からの復興を極めて困難にするであろう。

「南海トラフ巨大地震」からの復興は険しい。このことを想像すると「備え」がいかに重要であるか実感できる。ここで「備え」とは都市計画まで含めた包括的な「備え」である。住宅の家具止めや非常用飲料水・食料の備蓄はもちろん、例えば、地震や津波で甚大な被害が想定される地域から住宅や工場を徐々に撤退させていくことも必要である。これを強制的かつ一斉に実施することは難しいので、税制のインセンティブなどを利用し、家の建て替えや工場への設備投資の際に徐々に実現させていくことが現実的である。またコンパクトシティ化の流れ、老朽化したインフラの更新などと絡ませて実現させていくことも効率的である。現実的な手段で効率的に進めなければ対策そのものが経済にとって災害となってしまう。

ともすると「経済被害想定」は金額だけが引用されて中身は深く考察されない。さらにその被害額自体も多分に不確実である。しかしその中身を掘り下げると考えるべき多くの論点が見られる。本稿では復旧費用という観点から掘り下げてみたが、それだけでも多くの論点が見られ、被害の最小化のための「減災」策や「備え」がいかに重要であるかが理解できる。

※1 中央防災会議「南海トラフ巨大地震の被害想定について(第二次報告)～経済的な被害～」2013年3月18日

環境が生んだ、力強く、不思議で、直感的な「建築」

この1年、「ARCHITECT」の表紙を担当させていただいた。それは、なんとも楽しく、そして苦勞の連続であった。

当初の依頼では、表紙デザインは従来のままで写真のみを掲載してほしいというものだった。しかし、せっかくなかかわるのであれば、表紙を一新したいという思いが募り、デザインから変更することを提案。これに対し一部強い反対が起きた。

それは、長い歴史を持つ「ARCHITECT」への愛情から来ているもので、至極当然のこと。ただ、同時にJIAには変化を求める動きもあった。変えたい、変えたくない、両方が牽制し合う、なんとも難しい状況になってしまった。歴史あるところで新しいことをするのは何とも大変だと痛感。

そんな経緯もあり、連載開始時には不安もあったが、新しいデザインの評判はなかなか良くて一安心。しばらくはこのデザインが使われていくと思うが、私以降の人が写真やデッサンなどの配置で、どういうデザインセンスを発揮されるか、楽しみでもあります。

さて、表紙デザインの話はこれぐらいにして、写真の話へ。

今回は建築家以外がつくったもので、われわれに面白いと思わせるアノニマスなものシリーズ。それらが持つ刺激的で自由な発想は、われわれが気づかない、と

ても重要なことを教えてくれるのではないか。もしそうなら、なんて楽しい企画なんだと思ったが、連載開始時点でストックはほとんどなし。

探せばすぐ見つかるだろうと考えていたが、最初に伝書鳩の小屋が見つかったから、なかなか次が見つからない。やっと思ついても単発で、また次が見つからない…。結局、毎月1回は「どこかに面白い建物はないかえ～、誰かしらんかえ～」と呟きながら彷徨いまくることに。当初の考えが、いかに甘かったか次第に分かってくる(幾つか紹介いただいたものを掲載しました。それがなかったら…。感謝感謝！)

ところで、人間、目は肥えてくるもので、アノニマスなものでも、良さの基準が自分の中に自然と設定されてくる。その基準を超えるものに会おうと「おお！」と声が出てしまう。声が出たときは間違いなく良い。笑ってしまうほどわかりやすい。見つけたあとは、ボロボロの小屋などを必死に写真に撮っている完全に怪しい人状態に。通報されなくて良かった…。

ところで、撮影でもっとも難しかったのは、その場で見ている方が写真よりもずっと良いということ。写真では周りの環境まではなかなか伝えられないし、空気感も明らかに劣ってしまう。その場に至るまでの出会いの物語も表現できない。

しかし、空間の一部を切り取るという

点で写真の方が優れている部分もある。例えば情報を減らすことで、よりコンセプトなどが伝えやすいことがある。また、写真で建築をどうとらえるかで、単なる記録写真になるか、建築写真になるかが決まってしまう。自分は写真が下手だと言う設計者の写真がほとんど記録写真になっているのは、その意識がないからなのだが…。

最後に、二つ私が気がついたこと。

一つ目が、良いものの多くが、まだ見えていない時点でなんとなく出会いの予感を感じさせた。「この辺り怪しい。何か感じるぞ」。そして目の前に現れる。要するに、その場の力、つまりは環境が面白いものをつくる原動力になっているのかもしれない。二つ目は、装飾性を意識しない、必要だからとつくってしまった形には嘘がなく、力強いということと、その力強さには、不思議な造形的バランスが備わっていること。

これらのことはわれわれに、「頭でこねくり回す前に、もっと直感的に感じる」と言っているような気がするが、さてどうだろうか。

この企画を通して皆さんがさまざまなイメージをしてきていた

ありがとうございます。

横関 浩 | STANDS ARCHITECTS



表紙デザイン検討時につくった案



「必要だから」がわれわれの想像をはるかに超える



出会う前になぜか予兆がすることが多い

劇場をテーマに議論
世界劇場会議名古屋 フォーラム 2015

JIA 東海支部後援 (予定)

- 日時：5月29日(金) 受付13:00～
- 会場：愛知県産業労働センター「ウイंकあいち」1202会議室
(名古屋市中村区名駅4-4-38)

14:00～16:15

Session-1 「劇場の天井は大丈夫か？」

東日本大震災で多発した大空間における吊り天井の崩落事故。既存の劇場の天井は安全なの？ 建築基準法で天井脱落対策の規制強化がなされ、平成26年度より劇場のような大空間の吊り天井(特定天井)は建築確認の審査対象となった。多くの劇場は既存不適格になっている恐れがある。いま劇場が直面している重大な問題についてわかりやすく解説し、技術的そして運用の両面から考えたい。

講師 本杉省三(日本大学理工学部教授) ほか
進行 松本茂章(公立大学法人静岡文化芸術大学文化政策学部教授)

16:30～18:45

Session-2 「劇場で働きたい！」

劇場にはどんな仕事があるんだろう？ 求められる人材とは？ 専門教育を受けていないとダメ？ 大学卒は使えないって本当？ 独自のアートマネジメントや音響・照明の資格・研修制度はあるの？ 大学と劇場の連携による人材育成のあるべき姿とは？ 採用側が提示できる雇用条件・雇用環境と劇場で働きたい人たちとの間で起こりうるミスマッチとは？

話題提供者 初山勝人(長久手市文化の家事務局長)
中 康彦(損害保険ジャパン日本興亜・ひまわりホール係)
児玉道久(榊尾総合舞台代表取締役)
山田 純(名古屋芸術大学音楽学部教授)
進行 山出文男(NPO法人世界劇場会議名古屋副理事長)

19:00～20:30

交流会

会場 愛知県産業労働センター「ウイंकあいち」1202会議室
※やむを得ない事情で講師が変更になる場合がございますのでご了承ください。

- 参加費：
 - ◇セッション参加費
一般 2,500円 (ITCN会員 2,000円)
学生 1,500円 (ITCN会員 1,000円)
 - Session-2参加券 1,000円
 - ◇交流会参加費 2,000円
- <参加費振込先 銀行口座>

口座番号：三菱東京UFJ銀行 栄町支店 普通 1186768

口座名義：特定非営利活動法人世界劇場会議名古屋

※確認のため、振込を証明する書面をFAX等にて事務局まで送付してください。

- 定員：100名
 - 申込先・事務局：NPO法人 世界劇場会議名古屋 (ITCN)
〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-14-12グランビル2B
TEL&FAX 052-232-2270 E-mail itcn@itc-nagoya.com
HP <http://www.itc-nagoya.com>
 - 主催：NPO法人世界劇場会議名古屋(「世界劇場会議名古屋フォーラム2015」実行委員会)
 - 後援【予定】：愛知県／名古屋市／愛知県教育委員会／名古屋市教育委員会／(公社)日本芸能実演家団体協議会／(公社)企業メセナ協議会／(公社)全国公立文化施設協会／(公社)劇場演出空間技術協会／文化経済学会<日本>／日本NPO学会／日本アートマネジメント学会／日本音楽芸術マネジメント学会／日本文化政策学会／(公財)舞台芸術財団演劇人会議／愛知芸術文化協会／名古屋ホール運営協議会／愛知県舞台運営事業協同組合／(公社)日本建築家協会東海支部
- ※本フォーラムはCPD制度の共通認定プログラムとして申請予定。

第10回

JIA 愛知美術サロン展

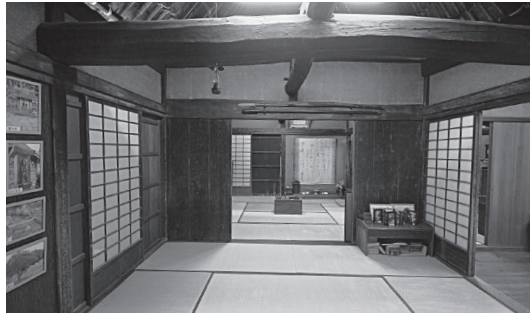
4月14日～19日

JIAの会員には、設計活動とあわせて芸術の世界に喜びを感じ制作に励んでいる会員がたくさんいます。作品を通して会員や市民と交流を図る場所として、展覧会を開催します。今年は第10回を迎えます。ぜひお立ち寄りくださいますよう、ご案内申し上げます。

- 日時：4月14日(火)～19日(日)
10:00～18:00(最終日は17:00まで)
- 会場：東桜会館 1階ギャラリー(地下に無料駐車場あり)
名古屋市東区東桜2-6-30 TEL 052-973-2223
- 出展者：神谷義夫、栢本良三、榎戸正浩、川窪 巧、後藤文俊、田中英彦、福田一豊、山田尊久、山田正博、吉川法人



南より主屋、釜屋を見る



主屋「おおえ」から「おでえ」を見る。「田の字」形式間取り

所在地：愛知県新城市
黒田字高縄手7
形式：分棟型民家
(釜屋形式)
規模：桁行5間・
梁間3間
年代：18世紀後半、元
禄2年(1689)
頃の建物とも
伝えられる
国指定重要文化財

■発掘者コメント

概要:釜屋建て民家が公開されているのは、愛知県下ではここ望月家と新城市桜淵公園内展示場の2カ所のみ。豊川流域、天竜川流域に分布する全国的にも珍しい分棟型民家(釜屋形式)。望月家住宅は現存する同種の建物としては一番古い建物で原型をよく留めている例で、日本昔話に出てくるような懐かしい日本の原風景の様相を醸している。

由来:当家は武田氏の家臣で長篠の合戦に敗れたあと、長野県望月町に帰らず現地に土着したのが先祖と伝えられる。初代の四郎左衛門は

望月の城主三郎の弟とも伝えられており、代々四郎左衛門を世襲し現在で十四代目を数える。江戸時代は薬問屋を営み、明治には木挽をしていたとも伝えられる。

間取り:建物は平入り主屋(おもや)と妻入り釜屋(かまや)がT字形に直交するように約1間(1.8m)離して、釜屋の部分が東北の角で60cmほどずれている。

理由は、あえて不完全なものとして、邪悪なものが近づかないようにしているのではないかとの説があるが、私的には、2棟の接する部分は「にわ」の上にあたり、ここから落ちる雨を受ける



ために丸太を割ってくりぬいた樋をかけ、表側に落とすための勾配、雨量確保のためと思う。

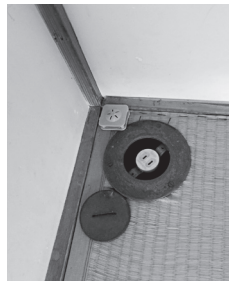
富田正行 | エム・プロダクツ



当時の御用邸としては初の洋風建築



西附属邸 玄関



電気コンセント



沼津垣

■発掘者のコメント

沼津御用邸は明治26(1893)年に造営され、明治・大正・昭和の三代にわたり昭和天皇をはじめ、多くの皇族方に利用されてきましたが、昭和44(1969)年に廃止されて沼津市に無償貸与され、現在は沼津御用邸記念公園として市民に開放されています。

本来、御用邸は本邸、西附属邸、そして東附属邸とで構成されていましたが、本邸は昭和20(1945)年7月の沼津大空襲によって焼失し、その後は西附属邸が本邸の役目を果たしてきました。施設はかなり老朽化していましたので何回かの再整備の結果、素材やデザ

インは可能な限り原型に忠実に再現されています。

屋根瓦には菊の御紋が入り、窓ガラスは日本では入手できないため、ドイツから輸入されているそうで、床に設置されている照明器具用コンセントも時代が感じられます。廊下、居室で使用されている釘隠しなどの飾り金具もいろいろなデザインのものを使用され、一見の価値があります。また、浜風を防ぐためにつくられている沼津垣は、細い篠竹を十数本ずつ束ねて網代編みにして繊細な趣が感じられます。

所在地：静岡県沼津市下香貫島郷2802-1 JR沼津駅より伊豆箱根バスで約15分
建設年：明治26(1893)年
構造・規模：木造平屋建て1,270㎡
設計者：片山東熊(宮内省)
公開状況：年中無休(12月29日~1月1日は休園)
所有者・問い合わせ先：沼津市
参考資料：沼津市産業振興部観光交流課WEB、沼津御用邸記念公園パンフレット



谷村 茂 | R&S 設計工房



デザインビルド導入の問題についても議論

本部理事 鳥居 久保



2014年度第4回理事懇談会は、2015年1月22日（木）13時40分～16時30分までWEB方式会議（JIA館5階A会議室）にて行われた。出席者は会長以下、理事21名（2名欠席）、監事1名（1名欠席）、事務局3名。

【議題】

1. 建築家資格制度「JIA正会員ルート実現について」（大澤理事）

1月10日九州支部、1月16日関東甲信越支部で大澤委員長が各支部に出向き、「JIA正会員ルート実現について」を会員集会の場で説明した。1月27日は北陸支部で予定。北海道、中国は実施しない。

<意見>九州支部では、正会員の資格を厳格化して登録建築家を担保すべき、制度制定に急ぐ必要はない、会員減少により経済的破綻をきたす、国家資格化ではなくJIAとしては正会員＝登録建築家でやるべき、CPD単位が取得できる配慮・対策が必要、なぜUIAアコードを守らなければならないか、など。関東甲信越支部では「JIAアーキテクト」の名称は分かりやすい名称にすべき、準会員制度も含めて正会員が登録建築家になることのルールマップが必要、JIAの財政と登録建築家の財政を分けるのか、JIAの正会員の資格要件を合わせて見直しをすべき、など。

<芦原会長の所見>士会との2002年合意に基づいた国家資格は実現困難。そこでJIA正会員全員が登録建築家になることを提案する。審査基準とCPDとで担保された登録建築家が、市民に信頼される建築家として認知されることが目的。そうすれば国家資格への道筋も開ける。一方で、現在オープン化されている「登録建築家」には、「兼業」も存在する。つまり正会員の登録建築家の専門性と、登録建築家全体の（専+兼）業性の2重構造（今後すり合わせが必要）。ゆえにJIA正会員を区別して「JIAアーキテクト」と呼ぶという提案にもつながっている。理事会内での意見としては、登録建築家でなければ正会員ではないという運営は法人法的には認められない可能性があり制度化には注意が必要、会員規則上CPD取得は会員の義務であり履修しない人が多いことは問題、議論が始まるのがあまりに遅すぎる、正会員なのに登録建築家にならない会員に対して誤解を解くべき、などの意見が出た。

2. 「JIA建築家大会2016」開催について（原田事務局長）

2015年度は北陸支部の金沢開催だが、2016年度の開催地が決まっていない。関東開催や、支部大会に全国が乗る形や、他会との共同開催など継続して検討。

3. JIA事業活動助成について（赤羽委員長）

1月22日、助成金の審査を行った。9つの事業申請のうち、1つは2014年度。あと8つは2015年度で予算案も助成枠も未定。

4. 東京都オリンピック・パラリンピック施設のデザインビルド導入について（上浪副会長）

東京都と東京3会とで意見交換。JIAが問題視するのは、基本設計

と実施設計が分離され、実施設計以降はゼネコン中心の設計に移行する点。都への要望・確認事項として以下の3点を提出。①基本設計と実施設計が分離された場合、基本設計者が主たる設計者となること、②あくまで設計施工分離が原則、③デザインビルド導入の経緯を明確にすること。市町村が安易にデザインビルドに走る懸念があり、都の姿勢を誤解されないようにする。

5. 国交省官庁営繕部とのデザインビルドに関する意見交換について（森副会長）

1959年から公共事業の設計施工分離が存在した。1995年にそれが廃止になって以降、主に土木工事においてデザインビルドが試行検討され、2005年には品確法に記載されたことで、建築界にも一括方式の導入が可能になった。この問題について、東京3会はコンソーシアム型までを容認し、ECI型については国交省は試行段階としている（愛知県新城市）。

<JIAとしての考え方>①設計者責任の明確な担保が問題。基本設計と実施設計が分離された場合、基本設計者が社会的な責任を担保すべき。確認申請上での法的、性能上の責任を持つ実施設計者ではない。②公共工事の基本は「透明性、公平性が確保」され、「納税者への説明責任を果たす」こと。数量や積算の責任を担保できるのは基本設計者だけ。実施設計から参画した施工者では社会的責任を担保できない。

6. 公共建築協会に対する五団体による技術者情報に関するお願いについて（筒井専務理事）

5団体がそれぞれ自主的に運営しているCPDなどの自己研鑽システムでの研修履修や技術研修の情報をPUBDISの技術者情報の掲載対象項目に該当させるよう公共建築協会に要請した。

7. 国際コンペ（中国瑞昌市）について（岩村理事）

UIA公認の国際コンペ。登録は2/5までで、作品提出は4/10。16の敷地に対する16の建築のコンペ（13が建築家対象、3が中国の学生対象）

8. JIAまちづくり会議委員について（連理事）

連委員長と7人の委員が確定。九州、近畿支部の2人が2月理事会での承認予定。北陸は今後決定していく。

9. 厚生年金基金の解散および後継制度について報告（筒井専務）

解散が決定された。後継制度を新たに設立の上、継続していく。

10. その他

- ・1/15付、役員選挙候補者の第1回告示を行った。2/27が立候補届け出の締め切り。
- ・フェロー会員に伴う寄付金について、あくまで任意とする（総務委員会での決定）。その名目や使途は「次世代の若手支援」の文言を運営マニュアルに入れる。

東海支部役員会報告

今回の支部役員会で東海支部、各地域会の次年度予算が承認されました。次年度の予算をこの時期に総会を経ずに決めることに多少の違和感を覚えますが、定着すれば次年度の活動をスムーズに進められるシステムだと思います。また、『JIA正会員』は全員『登録建築家』については会員のみならず共にさらに議論を深めることが望まれます。

中西修一 | shu建築設計事務所



日時：2015年1月30日（金）16:00～18:00

場所：昭和ビル5階 JIA支部会議室

出席者：支部長、幹事10名、監査2名、オブザーバー8名、顧問1名

1. 支部長挨拶

理事懇談会で正会員ルートの実現について意見が多数出された。

2. 報告事項

(1) 本部報告

①2014年度 第4回理事懇談会（1/22）（石田）

※P21理事会レポート参照

②第18回 フェロウシップ委員会（1/19）（谷村）

・フレッシュマンセミナーとリフレッシュセミナーの参加者が重なる可能性があるため、合同で行うなど各事業の委員会等で検討をお願いしたい。（久保田）

・フレッシュマンセミナーは理事会承認事項ではない。1年目は試行であり、2年目以降の位置づけ・意義はきちんと議論する必要がある。（小田）

③第5回 支部広報委員長会議・第10回 本部広報委員会（1/20）（奥野）

・JIAロゴのデータを本部に依頼して支部で受け取った。（支部事務局）
・運用基準の完成にはまだ時間がかかる。当面の運用については各自の良心に任せる。

④職能資格制度委員会・建築家資格制度委員会合同委員会（12/25）（植野）

・役割分担を決めて検討中（1.登録建築家義務化への規定類整備、2.会費関係、3.CPD関連、4.会員資格関連、5.手続き関連、6.広報関連）。1級建築士を持たず登録建築家になれない会員が現在141人でそのうち65歳未満が百数名。また、正会員を全員登録建築家にするには定款改正が必要なのではないかとの議論もある。3月までに整理が必要であるがスケジュール的に厳しい状況。

⑤CPD評議会（1/28）報告なし（次回報告資料あり）

(2) 支部報告

①第22回 JIA 東海学生卒業設計コンクール2015」協力をお願い（吉川）

②中部公共設計懇談会（1/19）（石田）

・小田義彦支部顧問、石田壽支部長、鳥居久保本部理事、水野豊秋愛知地域会長、加藤幸治岐阜地域会長、豊田由紀美三重委員が出席。JIAからはデザインビルド方式やECI方式による入札契約方式について、今後の取り組み方針を質問した。

(3) 各地域会からの報告（各地域会長） ※P23 地域会だより参照
議事

1. 審議事項

①事業報告 JIA ゴールデンキューブ賞2013/2014（柳澤）

・事業報告・決算の件、2015年1月30日付で委員会を解散する件を承認。
・助成金の残務処理の確認をする。
・2015年4月からは新名称での活動を検討中。

②事業報告 東海支部会員集会（12/16）（鈴木祥）

・事業報告・決算を承認。
・意見聴取、討論集を資料として添付（一部未訂正部分あり）
・今後、集会に出席していない支部会員へ向けでも意見徴収を予定している。

・他支部の会員の考えなど支部間の密な情報交換を望むとの意見（森川氏より）あり（久保田）

③正会員 退会届「岩崎守」（村松）、「今岡睦夫」（中西）

・「岩崎守」氏、死亡退会。手続きは本部への連絡のみとなる。今後の運用方法としては、記録として地域会で退会届を作成し支部で保管する事を確認。

・「今岡睦夫」氏の退会を確認。

④2015年度 支部予算について（久保田） 承認。

予算に「建築と子供たち全国会議」、「支部大会」を計上。財政再建については事務所移転なども含め検討していく。

⑤2015年度 各地域会予算について（久保田） 承認。

2. 協議事項 なし。

3. その他

①東海支部大会2015実行委員会（1/21）（谷村）

日程：2015年11月13日（金）・14日（土）に決定。予算案2,286,000円。会場はテレビ塔を仮予約済み。

②2014年度リフレッシュセミナー参加者について（久保田）

支部より4名参加。愛知 川口亜稀子・関口啓介、三重 森本雅史、岐阜 寺下浩

③東海支部「持出役員会（静岡）」（2/27）について（尾林）

沼津御用邸記念公園見学→役員会：プラザヴェルデ小会議室（沼津駅北口）

④「ARCHITECT」編集業務委託契約の更新について（石田）

業務委託契約書（案）にて契約予定。委託料に「消費税別途」を明記（月額114,286円（消費税別途）、取材費一件当たり47,619円（消費税別途））。2014年度は消費税5%での算定とし、2015年度より8%の算定となる。

⑤本部役員候補者選挙について（石田）

東海支部は1名。告示は1/15、立候補届出締切が2/27。

⑥2015年度 支部役員会日程について

2015年2/27、3/27、4/23、5/8、6/11、7/2。

⑦東海支部事務局会議室の予約について（久保田）

今後の運用について：(1) 支部の黒板に記入→(2) 前田さんに連絡→(3) 前田さんがHPに入力、とする。ただし、愛知の会員が委員長などの責任者の場合、協力作業をお願いする。

⑧「NAGOYA Archi Fes 2015 中部卒業設計展」について（久保田）
特に協賛はしないものとする（日程的にJIAの卒コンとの干渉はない）。



めがね橋

いなべ市にある私の自宅の前には三岐鉄道という黄色の電車が走っています。ジブリ作品の映画にあるようなひと昔前の可愛い電車です。その三岐鉄道の北勢線、楚原駅～麻生田駅の間にめがね橋というコンクリートブロックで築造された3連のアーチ橋があるのです。正式には明智川拱橋というそうです。大正5年に竣工のこの橋は、土木学会では県指定の文化財レベルに相当するようです。

引越した当時は可愛い電車が来るのを待ち、子どもが手を振っていた記憶がありますが、実はたいへん貴重な橋だったんですね。



ガタンゴトンと時速30kmくらいでしょうか？ ゆっくりと走る黄色い電車はこの街になじんでいるような気がします。このような気持ちが安らぐ風景は大切にしたいものです。

いなべ市のHPより

体に優しい農業レストラン フラール

いなべ市にある農業レストランを紹介します。いなべ地域の農家さんの新鮮で安心な農作物を料理して、20～30種類のお料理をふるまってくれるビュッフェスタイルのお店です。私のお勧めは、新鮮なお野菜を使った煮物やサラダ。時には珍しい種類のトマトもいただけます。

これだけではありません。いなべ産のお蕎麦は歯ごたえ・風味ともありとてもおいしいです。小さなお子様にはヒレカツだと思ってしまうのですが、たいへん柔らかく食べごたえも十分だと思います。近くには梅林公園があり、3月には4,500本が咲き誇る梅まつりが開催されます。最盛期にはとても綺麗な梅のお花が鑑賞できます。お近くにいらした際は、ぜひ寄ってみてください。

所在地：いなべ市藤原町3071
料金：大人1,188円、子ども864円、幼児324円（いずれも税込み）



レストランのHPより

地域会だより

<静岡>

- 2/27 静岡地域会東部持出役員会・建築ウォッチング
- 2/27 東海支部役員会(静岡地域会持出役員会)・懇親会
- 3/12 三会協同要望書の訪問提出(浜松市役所)
- 3/17 三会協同要望書の訪問提出(静岡市役所、静岡県庁)
- 3/19 3月定例役員会
- 4/7 静岡地域会決算報告会、監査会
- 4/16 4月定例役員会
- 4/27 2015年度通常総会・記念講演会：泉 幸甫氏(泉幸甫建築研究所)

<愛知>

- 3/2 総務委員会
- 3/3 <支部設計競技委員会>
- 3/4 職能・資格制度委員会+支部・資格制度委員会
- 3/4 <JIA東海住宅建築賞委員会>
- 3/5 <東海学生卒業設計コンクール委員会>
- 3/6 役員会(豊橋)
- 3/7 <支部登録建築家認定評議会>
- 3/10 相談委員会
- 3/12 住宅研究会
- 3/13 愛知・美術サロン
- 3/16 (愛知建築士会 専攻建築士審査評議会)
- 3/17 プリテン+支部・会報委員会

- 3/26 住宅研究会 スライドトークセッション「建築家の意伝子」

<岐阜>

- 3/10 視察研修旅行 8:00～20:00予定
御前崎・中部電力浜岡原子力発電所
- 3/13 「第14回ぎふ建築・生活・芸術系学生・生徒優秀作品展」
～3/18 (JIA岐阜共催)
場所：じゅうろくてつめいプラザ
3/14(土)
講演会：12:30～14:00
講師：木内俊克氏(木内俊克建築計画事務所)
テーマ：「Computation+：不確かさと計算、又は同語反復について/都市へ」
合同講評会：14:00～16:30
審査員：2名参加(JIA)
- 3月予定 平成26年度 第8回 役員会
場所：ハートスクエアG 小研修室
総会前準備について

<三重>

- 2/7 建築文化講演会 講師：三分一博志氏(アスト津 アストホール)
※詳細はP15掲載
- 3/13 第6回役員会、第8回例会

弔りこころ、大切な葬儀

葬儀のこと、お応えします。

古くから受け継いできた葬送という文化、
弔うことを今も大切に伝えます。
信頼と真心の葬儀で137年。
一柳葬具總本店

いちやなぎ斎場は、365日・24時間、
いつでも病院・施設等から直接入れます。

いちやなぎ中央斎場

名古屋市千種区千種二丁目19番1号
TEL (052)745-1212

いちやなぎ野並斎場

名古屋市天白区野並三丁目538番1号
TEL (052)899-0111

◆葬儀のお申し込み◆お問い合わせ◆事前相談は

TEL.052-251-9296

365日・24時間 一柳のスタッフが対応いたします!

日本建築家協会東海支部 特約店

創業137年の伝統と実績



株式
会社

一柳葬具總本店

<http://www.ichinagi-sougu.co.jp>
名古屋市中区栄三丁目14番11号
TEL (052) 241-0658 FAX (052) 263-1310



編集後記

●昨年東京都からオリンピック施設の発注でデザインビルト方式が採用され、専門の設計事務所にとっては一段と厳しい局面を迎えています。

今月号で2回目になりますが、若手建築家5名（JIA会員4名会員外1名）による「地域社会と建築をつなぐもの」が連続企画として6回にわたり掲載されます。特に若手から発言したいという要望を受け取り上げることになりました。ぜひ活発な議論を生む内容になることを期待します。

ところで昨年4月号（307号）から、創刊号以来、初めて表紙デザインが変わりました。昨年度は検討期間として毎号パターンを変えて9案程度提案をいただき決定していく予定でしたが、5案にとどまり、資料不足で年度内にデザインの決定に至らぬ残念な結

果になりました。表紙写真の担当は今月号から生津康広さんにバトンタッチされ、東海4県の「東海の集落」シリーズが始まります。多様な自然に適応する集落の写真の新しい発見が楽しみです。（福田一豊）

●編集後記を書くように依頼を受けたのはマドリッド滞在中だった。今月号の「建築を囲む科学」の対談で、農業経済学者の生源寺真一先生にお話を伺った。その中でも触れられているが、日本とヨーロッパの郊外風景の差異を改めて感じている。マドリッドからコルドバやトレドに電車で移動したが、都市と農村との境界は極めてはっきりとしている。日本のように虫食い状に住宅地と田畑が混じり合うような風景は見られない。人口減少と縮小する都市の問題を考えると、高度成長期に蚕食されてしまった農地と郊外住宅地の関係をどのように再編していくかは今後の大きな課題であろう。その意味で、今までは市街化調整区域にお

ける農地の宅地転用が進められてきたが、これからは宅地の農地転用を行う時代になる。そのためには法整備を含めたシステムを考える必要があるという生源寺先生のご意見には目を開かされる思いがした。

（伊藤恭行）

ARCHITECT

第319号

発行日 2015.4.1（毎月1回発行）

定価 380円（税込み）

発行責任者 石田 壽

編集責任者 牧ヒデアキ

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
建築ジャーナル内
ARCHITECT 編集部

名古屋市東区泉 1-1-31 吉泉ビル 703

TEL (052) 971-7479 FAX 951-3130

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

<http://www.jia-tokai.org/>